

編集後記

先日、社会経済史の若い研究者と話していた。優れた歴史学科の大学院で訓練されたプロの研究者だから、文献や資料の探し方は当然スキルとして身につけている。その彼が、18世紀から19世紀のインフルエンザを題材にとって、日本の感染症の伝播メカニズムを研究しているという。19世紀のインフルエンザは日本のどこまで到達したのかという話になって、私は、たまたま知っていた、江戸などから津軽までの感染症の伝播を調べた当学会のある会員による論文を紹介した。彼はその仕事を知らなかったが、それを読んで、非常に感心していた。感心した口調の背後に、軽い驚きが感じられた。礼儀正しい人物だから口には出さなかったが、プロの歴史学者ではないお医者さんが、歴史学に益するような水準が高い視点の仕事をしていることが彼にとって意外だったのだろう。

これは、小さなエピソードだけれども、現在の医史学会が持っている問題点とポテンシャルの双方を示唆している。歴史学を含めて人文社会科学は「医学」という現象の研究に本格的に取り組みは始めている。しかし、その研究の興隆が、医史学会と交わっているかという点、これまでのところはそうとは言えない。交わらないことで、人文社会科学における医療の研究が失っているものは非常に大きい。医史学が人文社会科学とクロスオーバーすることは、両者にとって大きな利益になるだろう。医学を知らない文系の研究者と、人文社会科学を知らない医者たちが、相互に孤立したまま「二つの医学史」を別個に研究している観を呈している現在の状況は、きっと変わっていくに違いない。さらに、医史学は、その交流から培った視点を、臨床医学や基礎医学研究へと還流させることができるだろう。『日本医史学雑誌』は、そんな役割を担う開かれた場になってほしい、そういう思いをこめて新しい版型の雑誌を眺めた。(鈴木 晃仁)